

研究成果情報

平成 30 年度

準高冷地におけるえだまめ早生茶豆品種「新潟系 14 号」の直播栽培技術		
[要約] えだまめ早生茶豆品種「新潟系 14 号」を準高冷地において直播栽培すると、5月初旬の播種で7月末に収穫できる。また、収量を高めるために、密植化が有効である。		
新潟県農業総合研究所高冷地農業技術センター	連絡先	TEL 025-765-2145 FAX 025-765-3018

[背景・ねらい]

県オリジナルの早生茶豆品種「新潟系 14 号」に対し、準高冷地の大規模経営体では省力的な直播栽培の志向が強い。現状は、直播による中生茶豆品種の8月収穫作型が実施されているが、出荷期間が短く、収益確保のため収穫期間の前進が求められている。そこで、7月末に収穫できる「新潟系 14 号」の直播栽培技術を開発する。

[内容]

- 1 準高冷地において、早生茶豆品種「新潟系 14 号」を5月初旬に直播すると、7月末に収穫でき、同日播種の新潟茶豆に比べ 10 日程度収穫期が前進する(図1)。また、5月 15 日の直播で、8月上旬の収穫となり、新潟茶豆との連続収穫ができる(図1)。5月前半の直播で得られるA品収量は 90~100kg/a 程度となる(表)。
- 2 無マルチ移植栽培と比較した場合、5月初旬播種では、苗立ちが遅れ、開花始期が4日、収穫開始が2日遅れる(表)。また、収穫期の生育量や着莢数、2粒莢の1莢重、A品収量は、同程度以上となる(表)。
- 3 5月初旬播種では、密植化によりA品収量が増加する(図2)。1,600 株/a を超えると、栽植密度を上げても収量の増加が見込めないため、栽植密度の上限の目安とする(図2)。

[導入効果]

省力化を指向する経営体で、直播栽培により7月末からの茶豆品種の継続出荷が可能になり、中生茶豆品種のみの栽培に比べ 10 日程度出荷期間が前進拡大する。

[導入対象]

準高冷地においてえだまめ直播栽培を行う経営体

[留意点]

- 1 準高冷地(標高 390~452m)の畑地における栽培結果である。
標準的な栽植密度は 1,000 株/a、施肥窒素量は 2.0kg/a(基肥 1.5+追肥 0.5)とした。
- 2 徒長による倒伏は見られず、除草目的の中耕は必要だが、培土はしなくてよい。
- 3 安定した発芽・苗立ちを得るため、表面砕土の向上に努める。

[具体的データ]

品 種	月 半旬	5月						6月						7月						8月									
		1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6				
新潟系14号 (早生)	○ ¹											○ ²²																	
				○ ¹⁵								○ ²⁸																	
新潟茶豆 (中生)	○ ¹											○ ³⁰																	
				○ ¹⁵																									

凡例：○播種日、◎開花始期、□収穫期

図1 準高冷地での直播栽培の播種時期と開花期・収穫期

注 平均起日の日付けを付記。ひげは最早・最遅日。平成27～29年の3カ年平均

表 栽培方法と生育量・収量性

区\項目		苗立ち状況		生育期		収穫期生育量			収量性			
播種期	栽培方法	時期 (月/日)	苗立ち率 (%)	開花始期 (月/日)	収穫期 (月/日)	主茎長 (cm)	1次分枝数 (本/株)	1株英数 (個/株)	A品英率 (%)	1英重 (2粒英) (g/英)	A品収量 (kg/a)	
												5月1日
	移植	5/13	100	6/18	7/29	22.6	4.1	41.0	65.0	2.9	82.6	
5月15日	直播	6/1	100	6/28	8/7	31.8	3.7	45.0	72.4	2.8	100.9	
	移植	5/28	100	6/29	8/7	27.6	4.5	44.8	70.3	2.7	94.4	

注1 表中の*は処理区間に有意差あり(P<0.05)。2反復、3カ年(平成27～29年)の平均。

注2 直播、移植とも無マルチ栽培。同一播種密度1,000株/a。

注3 苗立ち時期は、直播は初生葉展開期、移植は定植日。1英重はA品2粒英の英重/英数。

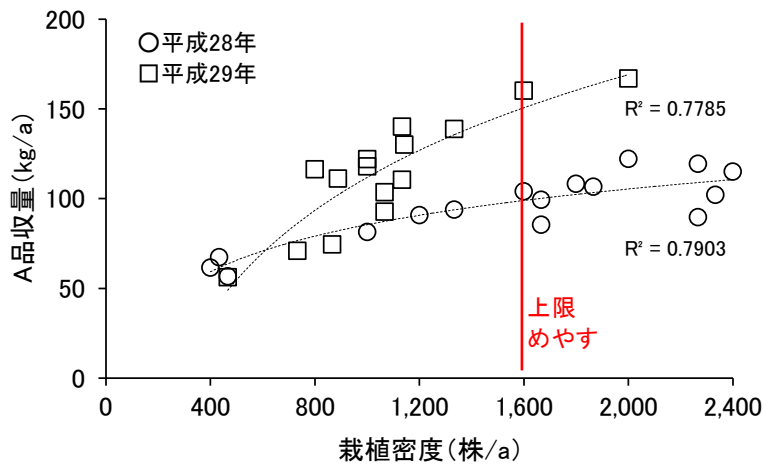


図2 直播の栽植密度とA品収量

注 調査地点は、高農技センターほ場及び現地ほ場(標高は390～452m)。

[その他]

研究課題名: 高標高・雪等地域資源を活用した新規品目・出荷差別化技術の開発

予算区分: 県単経常

研究期間: 平成27～29年度

発表論文等: なし